

[書評論文]

加藤重広『日本語修飾構造の語用論的研究』
東京：ひつじ書房。2003. pp. xx + 556. ISBN
4-89476-181-5

黒宮公彦

本書は9章から成っている。その構成と概要は以下の通りである。

第1章は「修飾をめぐる問題」。修飾には「意味的修飾」「構造的修飾」「機能的修飾」の3つの側面があり、全ての修飾構造が必ずしもこの三要素を満足しているわけではないことを指摘する。この点をふまえ、本書で扱う「修飾」の概念を定義する。その上で修飾に関してどのような問題点があるのかを指摘する。

第2章は「形容動詞か名詞か」。連体修飾の構造について分析を行っている。とりわけ、形容動詞の連体形の語尾は「な」と「の」とがありうることを指摘し、両者の違いについて詳細に考察している。その上で前者は《相対形容》、後者は《絶対形容》を表す語尾だという結論を導き出している。同時に、形容動詞と名詞や形容詞との連続性を指摘する。

第3章は「日本語における関係節構造の成立要件」。関係節の構造を分析しており、関係節と主名詞との関係は統語論的要因のみならず、意味論的・語用論的要因も深く関わっていることを示している。また、関係節構造が成立するためには「補集合」が想定できなければならないと主張する。

第4章は「連用修飾の分類と機能」。一般には形容動詞の連用形とされている「Xに」「Xで」及び副詞とされている「Xと」「X」（「突然」などニ、デ、トを伴わなくても成り立つもの）を中心に、動詞や形容詞の連用形（及びそれらにテがついたもの）なども含め、連用修飾について分析を行っている。

第5章は「ゼロ助詞の機能」。いわゆる「助詞の省略」現象について分析している。ただし本書では、助詞が省略されているというよりはむしろ、《ゼロ助詞》が生じていると考える立場を採る。そして《ゼロ助詞》は「脱焦点化」の機能を持っているという主張が行われる。

第6章は「名詞句と連用成分」。例えば「～へ」「～から」といった連用修飾をする名詞句にさらに「の」をつけて「～への」「～からの」といった言い方ができることから分かるよ

いてとらえようとしたりする (p.225)。まさに「語用論的側面を視野に入れた統語論」だと言える。

例文の文法性を判断する際にもこの態度は貫かれている。従来の研究であれば非文とされていたものでも、先行文脈を与えることによって適格な文となり得るものもあることを示し、その上でどのような文脈を与えても不適格となるもののみを非文としている。また、適格な文と非文とに割り切ってしまうのではなく、両者の間に「?」「??」の2つのランクを設け、なるべくネイティブ・スピーカーの直観と合致した判断となるよう努めている。例文の文法性の判断が杜撰であれば、それに基づいて構築された理論の信頼度が下がるのは言うまでもない。例文を極力文脈の中に置いて、その文法性を正確に判断しようとする著者の真摯な態度は、高く評価されてよい。

著者はもともと形容動詞という品詞に疑問を感じていたようで、それがこの研究の出発点になっている。本書の骨子は、おおむね以下のようなものだと言ってよいであろう。

1. 形容動詞の語幹と名詞との境界線は曖昧である。
2. したがって形容動詞という品詞を設けるより、形容動詞の語幹をある種の名詞と見なし、それに助詞や助動詞が後続していると考えた方が理にかなっている。
3. そのような立場では、例えば「確かに」は「確か」に格助詞ニが後続したものだと思えることになる。
4. ならば同様に、例えば「非常に」も一語の副詞ではなく、「非常」に格助詞ニが後続したものだと思わなければならない。

そして、上記の議論をふまえ、名詞・形容動詞の語幹・副詞の区別をなくし、「実詞」という一つの品詞にまとめるべきであるという、大胆な仮説が提案される。

本書は以上を中核としつつ、日本語の修飾構造全般について分析したものである。その対象はいわゆる「格助詞の省略」や「数量詞遊離」といった現象にまで及び、それらの全てに徹に入り細を穿った考察がなされている。大変な労作だと言える。

とはいえ、疑問に感じられることもある。いくつか問題点を指摘しておきたい。

本書が「実詞」という品詞を提案する根拠は基本的に語の統語的側面、とりわけ修飾構造を構成する際の性質に基づいているのだが、修飾以外の観点がほとんど欠けており、問題があると言わざるを得ない。例えば著者は「XのY」という表現のXにどのような要素が入りうるかということについては緻密に考察するのであるが、Yにどのような要素が入りうるかということについては考察していない。そして実際Yの位置には、名詞ならばほとんどのものが現れ得るように思われるが、他方、形容動詞の語幹や副詞については現れ得るものはごく限られているように思われる。しかも、Yが名詞の場合は「Xの」という要素は著者の言

う《叙述的な「の」》(pp.93-8)であることもそうでないことも十分にありうるが、形容動詞の語幹や副詞の場合は(たとえ非文にならなかったとしても)《叙述的な「の」》のみに限られるようだ。

(2) a. 私の犬／形容動詞の修飾／修飾の問題

b. *森の静か／*その話題の有名／*情報の確か

c. 大学生の ||ほとんど/?かなり／*とても／*非常(に)／*ちょっと／*少し|

(3) a. 洗剤でセーターをフワフワにする。

b. フワフワのセーター

c. ?セーターのフワフワが気持ちいい。

(3 c) のような言い方もそれほど間違いではないようにも思われる。しかしこの「フワフワ」は(3 a,b)の「フワフワ」とは異なった、より名詞的性格の強いもののように感じられる。実際(3 c)では「フワフワ感」などと表現するのがより一般的であろう。つまり、たとえ(3 c)のような言い方をするとしても、この「フワフワ」を(3 a,b)の「フワフワ」と同列に扱うのは問題があるかもしれないわけである。

また、副詞に関して p.423 には次のように述べられている。

- (4) 副詞と分類されてきた語の多くは、「Xに」「Xと」「Xで」あるいは「X」といった形式で用いられ、格助詞のついた名詞との境界線が曖昧であり、それが、形態的にも、意味的にも、名詞と副詞の境界線を不明瞭にしている。

ここで気になるのは「X」という形式である。明確には述べられていないが、第5章でゼロ助詞が詳細に検討されていることを考えれば、「X」という形式の副詞も、ゼロ助詞を伴った名詞との境界線が不明瞭だと述べているように受け取れる。しかしながら第5章で扱われた現象は、通常ならば助詞を伴うはずの名詞が、文脈によってはゼロ助詞を伴うこともありうる、という類のものであって、例えば「かなり」という副詞には文脈にかかわらず「*かなりに」「*かなりと」「*かなりで」という言い方はない、というのとは性質が異なっている。したがって「X」という形式の副詞をゼロ助詞を伴った名詞と同列に扱うことには疑問を感じる。

これらの事実、名詞・形容動詞の語幹・副詞の統語的な振る舞いに違いが見られることを示している。このような現象は探せば他にも観察されることだろう。

もう一点、統語的な問題を指摘しておこう。形式名詞の「の」や、あるいは「わけ」とい

った語の前に名詞が現れる時は「な」がつく。

- (5) a. 何かプレゼントをしようってことになって、結局選んだのがコーヒーカップ
 な 込んだ/わけ。
 b. 昔、野球部にいたことがあって、その時知り合ったのが山田な 込んだ/わけ。

中学校で習うような日本語文法であれば、このナは形容動詞の語尾ではなく、断定の助動詞ダの連体形だと説明するであろう。しかし本書では名詞と形容動詞の語幹を区別しないわけであるから、形容動詞の語尾と助詞や助動詞も当然区別しない。ナは《相対形容》(p.99)を示す連体修飾を作る語尾として一括されている。しかし(5)の「コーヒーカップな」や「山田な」が相対形容の役割を果たしているとは思えない。このナは本書の立場からはどのように分析されるのか疑問である。

次に意味の面に関する疑問点である。意味について議論を始めると収拾がつかずに終わることが多く、そのため著者も統語的振る舞いを軸として議論を進めたのだと推察される。それでも「犬」のような名詞と「かなり」のような副詞とは意味が全く異なるわけであり、これらを「語の外に活用に関わる要素が存在する」(p.524)、つまり助詞を伴うことで修飾句となるという理由で「実詞」としてまとめることには抵抗があると言わざるを得ない。

そもそも連体修飾は典型的には形容詞が担っている機能であり、名詞の中心的な機能とは言い難い。にもかかわらず、名詞も助詞を伴うことで修飾句となれる。これは一体どういうことなのか—おそらくこれが解決されるべき最も本質的な問題であろう。第2章では名詞と形容詞は連続体をなしているという議論がなされており、「形容動詞と呼ばれてきたものは、意味的には形容詞と共有する性質が高いが、形態的には名詞と共有する性質が高い」(p.156)と述べられている。これは言い換えると、形容動詞とは「形態的には名詞と似た振る舞いをするが、意味的には名詞本来の役割を果たさず、もっぱら修飾の機能のみに特化したもの」だということであろう。そうすると「名詞本来の役割とは何か」、「そもそも名詞とは何か」、あるいは「形容詞とは何か」、「名詞が形容詞的な働きをするとはどういうことか」といった疑問が当然生じる。

名詞が形容詞的な性質を帯びているのは事実であろう。英語でも、無冠詞の名詞は冠詞つきの名詞に比べると確かに形容詞的な性質を多分に帯びている。もともとそういう性質を持っているからこそ、助詞という「触媒」が与えられることで修飾の機能を果たすのだと考えられる。とはいえ、名詞と形容詞とはあくまでも別物である。名詞には名詞にしかない性質があるのだろう。この点をはっきりさせず、ただ「名詞と形容詞は連続体をなす」というだけなら、「名詞は形容詞である」ということにもなりかねない。また形容動詞についても、どの程度名詞的性質を帯びていてどの程度形容詞的性質を帯びているのかが分からなければ、

名詞と形容動詞をひとまとめにしてよいのかどうか判断のしようがない。「名詞、形容詞とは何であるのか」というのは非常に難しい問題ではあるが、それでも形容動詞について考察する前に明らかにしておくべき事柄ではないだろうか。

これは副詞についても当てはまる。名詞と形容詞や形容動詞が連続体をなすという議論は第2章でなされているが、副詞がどのように位置づけられるのかについては詳しくは述べられていない。第6章や第7章でも言及されているように、時を表す名詞や数量詞が副詞としても用いられるという傾向は確かにあるだろう。あるいはまた、連用成分が名詞的な性質を帯びている面があるというのも事実ではあろう。けれどもこれらの事実から名詞と副詞が連続体をなしていると一般化するのは難しいように思われる。

ここで興味深い事実を一つ指摘しておきたい。第8章では、修飾の際に後続しうるものとして25種類の形態を挙げ、24の語についてこれらの形態を取りうるか否かをまとめている。24の語の中には名詞、形容動詞、副詞などが含まれているが、各語それぞれに取りうる形態が異なっており、わずか24語ではあるが、例えば名詞のみに共通する特徴と言ったものを見出すのは困難である。名詞・形容動詞(の語幹)・副詞を明確に区分することはできないとする、著者の主張は十分に納得のできるものであるように思われる。しかしながら、これら24語について、純粹に第8章に挙げられた情報のみに基づいて、コンピュータソフトを用いてクラスター分析を行ってみたところ、以下の4グループに分けられるという結果が得られた。

- (6) a. 静か、有名、無名、元気、病気、風邪、健康、突然、大学生、理解、感心、主、はるか
 b. かなり、とても、だいたい、単、ちょっと、少し、ふと
 c. 突如
 d. べたべた、ゆっくり、主

わずかこれだけの例から結論を導き出すのは危険すぎるが、それでもごく大まかに言って「名詞は形容動詞の語幹とはひとまとめにしてもよさそうだが、副詞とは分けた方がよさそうだ」といった傾向が見て取れる。著者の意図した結論ではないかもしれないが、この方法によって名詞と形容動詞とが一つの品詞にまとめられるべきであることを客観的に示すことがもしてきたならば、それはそれで大変に意義のあることであろう。第8章の分析はまだまだ興味深い結果を生み出す可能性を秘めていると言える。

最後に、問題点というほどでもないが、少し気になったことが2点あるので、それについて述べさせて頂きたい。

すでに述べた通り、本書は文法性を極めて真摯に判断しようとする。だからこそかえって私個人との判断のズレが気になってしまった。とりわけ p.353 以降の二格の省略(もしくは

《ゼロ助詞》の使用)については違和感を覚えた。私はもっぱら関西弁圏の内側で暮らしてきたため、言語直観も当然関西弁の影響を受けているはずだが、その直観からすると「着点を表す『に』」はほぼ間違いなく省略され、それ以外はほとんど省略されない気がする。例えば下の(7 a)は本書 p.354 の(78)で挙げられている例であるが、たとえ口語であっても私にはかなり不自然に感じられる。

(7) a. 「飯田先生は、研究室φいますよ。」

b. 「飯田先生_h、研究室_hいますよ。」

ただ、東京の落語を聞いていると確かに(7 b)のように聞こえる。落語だけで判断してはいけませんが、関東では概して助詞が弱く発音される傾向があるのではないか。だとすると《ゼロ助詞》の使用頻度も他地域に比べて高かったとしても不思議はない。いずれにせよ、本書の文法性の判断はおおむね東京方言に基づいているようであり、それが全国的に見てどの程度支持されるものなのか、少し気になった。

もう一つ気になったのは、タイトルは「語用論的研究」となっているが、本質的には統語研究だということである。すでに述べた通り、文脈や百科事典的知識などを考慮に入れた健全な統語研究であり、だからこそタイトルにこのような言葉を使ったのであろうが、それでも統語研究には違いない。著者は自身の研究のスタンスについて次のように述べる。

(8) 語用論的な要因に影響される現象であっても、言語である以上、統語的な規則や制約を完全に免れるということはあるから、統語的なレベルの要因を踏まえた上で、語用論的な要因がどれくらい関わっているかを分析するのが、もっとも言語の実態に近づきやすい方法だと本書では考える。近年、語用論の研究が盛んになるにつれて、さまざまな個別の言語現象を扱ったものも増えているが、統語論的なレベルの記述を抜きにして、語用論的なレベルの分析に終始しているものもあり、個人的には違和感を覚える。(p.530)

著者のこのスタンスは理解できる。しかしこのような立場を採るのであれば、タイトルに「語用論的」という言葉を入れる必要はなかったのではないだろうか。語用論の専門家の中には、著者とはスタンスを異にする人も少なからずいるだろう。そうした人たちがタイトルの「語用論的」という言葉から、本書の意図とは違ったものを予想して読んだ場合、本書は期待外れな、不満の残るものとなるかもしれない。だとすればそれは非常に残念なことである。本誌の読者には語用論の専門家が多くおられるだろうから、この点を指摘しておきたい。

* * *

本書の「実詞」の提案は非常に大胆であり、そのため疑問を感じる点も多い。しかし修飾

についての研究としては、すでに述べた通り、語用論的知識つまり、文脈や言語外的知識といったものを常に念頭に置き、例文の文法性を十分に吟味しながら、広範に亘る現象を一つ一つ緻密に分析した労作である。修飾のみならず、関係節、格助詞、数量詞といったものに興味のある読者には一読の価値があるであろう。